

信じられない記事垂れ流し

ノンフィクション作家

吉永みち子氏



「Wai Wai」は、日本人ならありえない」と思っていた。記事に信じよう性を加えてしまった。外国の人は日本本の雑誌の色合いまで判断できないのだから、とんでもない誤解を生む危険もある。そういうコラムを外国人に丸投げしては現実とは恐ろしい。何を伝えるかではなく、アクセスが上がることを選択の基準に発信するならば新聞社ではない。

日本社会の二つの側面を描いたというが、側面どころか、まったくの誤報に近いものもあった。その上、日本のお母さんは「日本の女子高生は」と一般論のように書いてしまった。記事は雑誌記事にも「〜」という一片のお断りで責任を免れるものではない。それではたの垂れ流しだ。執筆していた記者を、試用期間を終えて特別嘱託にする時と編集長にする時の2度にわたり、それまでの仕事をチェックする機会があったはずだが、どういふ評価で責任ある立場にしたのか。また、コラムや記事を書かせる以上、誰かにチェックさせるのは当然のことなので、ノーチェックで載せ続けたことも信じられない。毎日新聞社の対応にも疑問が残る。これまで何度も問題が指摘されていた。5月に抗議が来てから6月21日までの1カ月弱、何をしていたのか。その間に事の大きさを察知して、組織として対応できなかった感覚の鈍さは愕然とする。それを日本中に知らせてしまったダメージは大きい。また、処分を発表し経過報告を掲載した時に、「明らかな違法行為には法的措置を取る」と加えたのも、理解しがたい。まず謝罪すべき段階に、自分も被害者だと言ってしまうのでは納得を得られない。ネットの問題を指摘し、正確な情報を伝えるべく努力してきた社の姿勢とは、Wai Waiの実態の間の溝はあまりに深い。重々受け止めて、MDNは根本的に立て直しを図ってほしい。

再発防止へ体制強化

深刻な失態 教訓にします

毎日新聞社が英文サイト「毎日テリリーニュース」(MDN)上のコラム「Wai Wai」に不適切な記事掲載し続けたことは報道機関として許されないことでした。日本についての誤った情報、品性を欠く性的な話題など、国内外に発信するにはふさわしくない内容でした。多くの方々に不快感を与え、名誉を傷つけ、大変な迷惑をおかけしたことで、同時に毎日新聞への信頼を真切ったことについて、深くお詫びいたします。

「開かれた新聞」委員会委員に聞く

まず、まことに申しわけありませんでした。内部調査の結果、問題のコラムは掲載の際にほとんどチェックを受けず、社内でも問題の大きさに気づかず、有識者に審査部門を置き、有識者に読んでいただけるとのことがありました。何度もあった外部からの警告も放置してしまっていました。いずれも深刻な失態であり、痛恨の極みです。起きた今回の問題には目が醒め、厳正に処分しました。毎日新聞社は紙面の品質を維持するため社内に紙面を審査する体制を整え、第三者機関「開かれた新聞」委員会を設置して紙面の質向上に努めてまいりました。しかし、英文サイトで決まりました。MDNを刷新するのは、海外向け正しい日本語の素材を発信するサイトとして立て直すためです。また、「Wai Wai」は既に閉鎖しておりますが、過去の記事も掲載されたことについて改めて見直しを求めたいと思います。今回、初めて英文サイトとしてきちんと位置づけていたのかという姿勢が問われました。この問題で失われた信頼を取り戻すため、全力を尽くす決意です。

読者からの批判 対応せず

作家

柳田 邦男氏



今回はいろいろな事故や、不祥事を分析してきた経験から言うと、典型的な落とし穴にはまっている。システムの中心部は安定していても、辺縁(周辺)部で安全性のレベルが落ちていく時に、大問題が起きる。例えば、インドの農業工場で大公害事件が起きた時、アメリカ本社システムのほりきりしていたが、現地での扱いがずさんだった。辺縁部で起きたことだからといって小さなことではな、重大な結果を招く。ネット社会ははじめは活字文化の辺縁に入ってきた。今では大きな存在になっているにもかかわらず、英文でのネット配信を辺縁扱いしてウオッチしてなかった。国際的な影響力を考えると、十分に洗練された情報提供かどうかチェックしなければならなかった。現代は活字メディアでも性的な情報が垂れ流して、モラルなき表現の自由の時代と言える。だが、コラムだから受けるからというだけで載せていいものではない。内容には節度や社会的なモラルが必要で、新聞は毅然としたモラルを示さねばならない。倫理なき言いたい放題は守るべき表現の自由とは言えない。

一番大事なのは読者からのクレームにきちんと対応したかどうかだ。読者からの指摘があり、回避されていたのに、誰もコラムを問題視しなかったのは無責任すぎた。部員一人一人が敏感に反応しなかった意識のゆるみや心理的な問題も分析する必要があります。また、なぜこの記者を編集長にし、編集長が書くものをチェックしなかったのか、外国人による英語表現ゆえの心理的な甘さがあったのではないのか。今後は、新聞本体と同様のレベルで、外国語を含む自社のすべてのメディアをチェックする体制作りをすることが必要だ。私は数年前からネットの負の側面に警鐘を鳴らしてきたが、今回の件はネット社会の落とし穴がどこに隠れているかわからないことを示唆するものだ。ただ、失敗に対する攻撃が、ネット・アッパーションによる暴動にも似た様相を呈しているのは、匿名ネット社会の暗部がたざざとではなくなっていること恐怖を感じる。この問題はマスコミのネットとのかかわり方の教訓にすべきであろう。

デスク機能ないまま放置

フリージャーナリスト

玉木 明氏



ネットには「情報の情報化」をもたらし機能がある。新聞も週刊誌も個人ブログもその個性を奪われ、ただ情報として並列に並べられる。このコラムの筆者はそういうネットの感覚に陥り、アンケラでわいせつな雑誌記事を引用して一般紙である毎日新聞のメディアに載せてしまった。ここで記者の仕事は、原稿を書くというより、情報を処理する作業に近い。こうしたことをやってしまう記者個人の資質はどうなのか。訓練を受けたことのあるジャーナリストとは思えない。日本のメディアに対して十分な知識があったのだろうか。彼が翻訳していた雑誌の中には、きちんとした裏付けを取らない記事もある。そもそも雑誌の記事を引き写して新聞メディアに載せる感覚は、普通の新聞記者ならば持ち合わせない。

ネットでの配信が始まって以来、問題が見て過ぎたばかり社内システムにも問題がある。編集長とはいえ、一人の記者を書くことからチェックすることまで一任していたのは解せない。新聞社では記者を指導し記事をチェックするデスク機能が最も重要だ。記者が何をどこでどのように取材しているのかを把握し、必要ならば追加取材もさせる。その機能がないまま、なぜ長い間、放置されたのか、そういう組織の在り方を見直さねばならない。また、新聞社では毎日、新聞を作るために、定時に何度も各部の関係者が集まって、その日の紙面をどう作るか話し合う会議がある。それもチェックシステムになっている。一人一人が孤立するのではなく、組織で動くことで有機的に、自動的にチェックができるスタイルを、新聞社は長年の経験で構築しているのだから、それを生かしてほしい。

英文サイトの軽視 反映

上智大教授

田島 泰彦氏



毎日新聞社がMDNをこれまでどのように位置づけてきたのか、どういう意味があっているのか、会社全体としての共通認識がなければいけない。その点を改めて問うべきだ。実際、はじめ何が起きたかわからなかったが、内容をチェックするところから、これほど問題の多いコラムを漫然と続けていて、しかもその内容を社内の人々が見ていなかったことを知り驚いた。

毎日新聞社として、英文で日本の記事を発信することが大事だということ意識があったとはとても思えない。頭の中では国際化、グローバル化の重要性を考えていたかもしれないが、少しでも大事だと思っていたならば、誰かが何かを言ったはずだ。もちろん執筆した記者個人にも責任はあるが、本来の編集に必要な最小限、最低限の体制が取られていなかった。対心が後手後手にまわったのも本紙ではないという気の緩み、位置づけがはっきりしないという背景があったのではないのか。だからといってやめるということではない。こういう状況ではやめるのが一番無難だと思えるかもしれない。しかし、長い射程で見れば長職のある部分、コアな部分で続けるべきだ。そのために、仕組みを改善して再生し将来もきちんとやるという前提で取り組まないといいけない。ユーザーの6、7割が外国からのアクセスだと考えると、国際社会の中でのジャーナリズムの役割、日本のあり方を毎日新聞の観点からどのように伝えていくのかを考えることはより重要だ。形式的なニュース、硬い話だけでは必ずしも伝わらない面があるのも確かなので、工夫も求められよう。本当の意味でいいものを作るためには共通認識と体制をどう築くのか、小手先ではなく説得力のある対応をすれば読者にも届き、道は開かれるのではないかと信じている。道は開かれるのではないかと信じている。道は開かれるのではないかと信じている。道は開かれるのではないかと信じている。